
インフィニット・ストラトス ~ 蒼き空を血に染めて ~

クリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜蒼き空を血に染めて〜

【Nコード】

N1266Z

【作者名】

クリス

【あらすじ】

国際連合対テロ機関？センチネル？そこに所属する唯一にして最高戦力の？織班一夏？彼がIS学園に入学するところから物語は始まる。

ープロローグー(前書き)

プロローグから

「プロローグ」

なあ・・・空って何色に見えるだろうな？

・・・俺には赤に見える・・・

赤い赤い血の様な赤だ・・・

何故かって？

あんだけ殺したんだ・・・

赤にも見えるさ・・・

数年前までは違ったのになあ・・・

俺は壊すだけ、殺すだけ

今も未来もかわらねえ・・・

なあ・・・そうだろ？

銃を握り弾薬を装填して安全装置を解除し照準を敵に合わせ引鉄を絞る。

何処に行こうがかわらねえ

学園に行こうが街に行こうが戦場に行こうが何一つかわらねえ。まるで同じクソツタレだ

俺の人生はこんな筈じゃあなかった筈だ。

愚痴を言ったところで何もかわらねえ

俺は兵士だ。

なんの感情も持たずなんの悲しみも感じない機械だ。

織班一夏は死んだんだ。

今の俺はただの？殺し屋？

なあそうだろう？

ープロローグー（後書き）

お、思ったより難しい・・・

Ⅰ主人公設定 ⅠS設定Ⅰ（前書き）

Ⅰ夏が殆どオリキャラなのでⅠ応設定を付けます

Ⅰ 主人公設定 Ⅰ S設定Ⅰ

原作からの変更点

性格がかなり歪んでいる。

年齢が18歳

よく葉巻を吸う

白式に乗っていない

Ⅰ S設定

名前 ウォー・ドッグ：ヘビーアームズ

世代 第二世代

説明

国連対テロ機関？センチネル？が開発した異形のⅠ S、全身装甲の一機で主力戦闘機二個大隊分に指摘する戦闘能力を持つ。装甲はナノマシンの結晶で、できた特殊合金製の強固な装甲、これによりエネルギーをシールドに消費されことなく戦闘を続行できる。

武装

対Ⅰ S戦闘用20mmアサルトライフル：WDIMA01

全長2.5m

重量107kg

装弾数100（ドラムマガジン）

射程 4 0 0 0 m

対 I S 戦闘用 2 5 m m スナイパーライフル : W D I M A 0 2

全長 2 . 8 m

重量 9 7 k g

装弾数 1 5 (箱型弾倉)

射程 6 0 0 0 m

対 I S 戦闘用 1 5 m m 自動拳銃 : W D I S A 0 1

全長 5 7 c m

重量 3 7 k g

装弾数 1 5

射程 7 0 0 m

対長距離戦闘用 8 0 m m 滑腔砲 : W D I H A 0 1

全長 4 . 5 m

重量 4 5 0 k g

装弾数 5 (箱型弾倉)

射程 7 0 0 0 m

対 I S 戦闘用 6 連装ミサイルポッド : W D I H A 0 2

全長 1 . 8 m

重量 5 5 0 k g

装弾数 6

射程 2 4 k m

対近接格闘用ブレード内蔵型実体装甲

実体装甲

厚さ 2 5 m m

材質 ナノマシン合金

ブレード

刃渡り105cm

ウォードッグ基本スペック

全長2.8m

重量1.6t

最高速度2600km/h

シールドエネルギー1500

搭載武装5個

Ⅰ主人公設定 ⅡS設定Ⅰ（後書き）

何かチートかも・・・

武装は話が進むにつれて増えていきます。あと感想をくれた読者様
ありがとうございました！

1011 (前書き)

やっと完成した。

どうしてこうなった・・・

俺、織班一夏は困惑していた。何故ならほぼクラスメイト全員が俺を凝視しているからだ。

あー面倒なことになった。何で俺がこんな平和ボケした学園に入学しなきゃいけないんだ？本当勘弁してくれよ！クソツタレが！！つか

皆俺を見過ぎだぞ！

そんなことを考えていると教室のドアが開き担任と思われる人間が入ってきた、だがその人間は教師と呼ぶにはあまりにも頼りない。

「皆さん入学おめでとう！私は副担任の山田真耶です。」

無言・・・

「えっ・・・ああ・・・」

無視されたのが辛いのか副担任はかなり動揺している。

おいおい副担任がこんなんで大丈夫なのかよ？つたからこんな所には行きたくなかったんだ。前で副担任が何か言っているが俺は無視して思考に沈む。

何故今更俺をIS学園に入学させたんだ、あれか？俺が男で唯一ISを使える奴だって世間にバレたからか？それとも亡国企業にたいする牽制か？確かに最近奴らの動きが活発になっている。一ヶ月前

だってフランスのラファール・リバイヴが二機強奪された。確かにセンチネルの最高戦力である俺をIS学園に入学させりゃ奴らは動きずらくなる。だが、別に入學させなくても牽制は出来る。それとも・・・姉貴の意向か？・・・考えても埒があかねえ

「・・・班君！・・・織班君！」

思考に沈んでいると前で副担任が俺のことを必死に呼んでいた。

「何ですか？」

俺が顔を上げると副担任が俺に顔を近づけていた。

「えっ・・・と・・・あ、から始まって今お、なんだよねえ・・・だから自己紹介してくれるかなあ？ダメかな？」

何だ、そんなことか。別にそんなビクビクしなくてもいいじゃねえか

「わかりました。」

俺はひと呼吸おいて立ち上がった。

「名前は織班 一夏 年齢は18だ。好きな物は葉巻とウイスキー
嫌いな物は中途半端な兵器と下らない人間だ」

「 「えっ・・・？！」 」

クソッ！！ミスったか。俺が内心慌てしていると不意に出席簿が飛んで来たのでギリギリで避けた。

「アブねえ!!」

顔を上げると目の前には俺の姉、織班千冬が立っていた。

「お前はロクに自己紹介も出来んのか？」

「仕方ないだろ。姉貴」

また出席簿が飛んで来たので肘でガードした。

「ふん、いい反応だな。しかし学校では織班先生とよべ」

「わかった」

「織班君って千冬先生の身内？」

「いいなあ代わってほしいなあ」

「男でISが使えるのもそのせいなのかな？」

と、クラスメイト共が口々に騒ぐ。いつもそうだISが登場してから皆俺のことを織班千冬の弟としか見なくなつた。もしISが誕生しなければ俺はもつと幸せだったかもしれない・・・俺の人生は違つたかもしれない・・・
運命を呪つても仕方ないか。

「先生会議はもう終わったのですか？」

「ああ、すまなかつたな山田君クラスの自己紹介を押し付けてしまつて」

と、言つと姉貴は手を腰に当てながら

「諸君、私が担任の織班千冬だ！一年でお前らを使い物にするのが私の仕事だ」

キャー……！！！！！！

「千冬様よ！！本物の千冬様よ！！！！！！」

「私あなたに会いたくてここに来たんです！北九州から！！」

おい！お前らいきなり叫びだすなよ！！耳が潰れるじゃねえか！！
心の中で愚痴を言いながらおれは思った。

つくづく平和ボケしてやがるな。そんな下らない理由でここに来たのかよ。お前らは自分がどれだけ人を蹴落としてきたかわかつてんのかよ？お前らの下にどれだけ入学したかった奴らがいると思ってるんだよ？

そんなことを考えていると姉貴が？ヤレヤレ？といった感じで

「まったく、よくも毎年これだけ馬鹿が集まるものだな。それとも私のクラスにだけ集中させているのか？」

キャー……！！！！！！

と、またクラスメイト共が騒ぎ出す。クソツタレが！それでも兵器の扱い方を教える学校なのかよ？

「諸君らには半年でISの基礎知識を覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で身体に染み込ませろ！いいか？いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言うことには返事をしろ」

「「はい！」」

なんとも傲慢だなあ。俺の姉貴は第一回モンド・グロツソ優勝者だ。ご自慢のISを使って見事優勝した。しかし第二回目の大会で・・・

- ・ 思い出すのはやめよう。いい思い出じゃないからな・・・

副担当がISについて説明を始めた。ヤレヤレ面倒なことになったもんだ。これならまだ敵に向かって銃を撃つほうが全然まだ。

・・・何も変わらねえまるで同じクソツタレだ・・・

1011 (後書き)

とても難しいです。あと読んだら是非感想を下さい。お願いします！

1021 (前書き)

ちよつとシリアスにしてみました。あとこんな筈は嫌だ。と言う人がいたらすみません。

IS、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかし『制作者』の意図とは裏腹に宇宙進出は一向に進まず、結果としてこの『力』の塊は兵器へと成り下がりその後、建前上は『スポーツ』として認識された。

しかし、この『力』の塊には一つ重大な欠点があった・・・。

それは、この『力』の塊は女性にしか反応しない、ということだ。

男が触っても何も反応しないただの物体だ。

それだけなら何も問題は無い、問題なのはその『物体』が一軍隊にも至適する破壊力を持っていることだ。

たった一機で戦局を覆しその戦闘力は既存の兵器とは天と地ほどの差だからこそ世界は『それ』に恐怖し、同時に憧れた。結果この現在の『女尊男卑』という狂った世界が誕生した。

しかも、因果なことにその『兵器』は兵器としてあつてはならない機能が付いているということだ。

一つは『絶対防御』これは操縦者の命に関わる攻撃が仕掛けられた場合、最低限操縦者の命を守る、というものだ。これでは実際の戦闘時に思わぬ事故が発生する可能性がある。

もう一つは『自己進化』ISには自機の戦闘経験、その他の経験が蓄積すると形態、性能、などを大幅に変化させる機能が付いている。軍隊と言つものは正確な統制が取れている時に真価を発揮する。だが作戦中にISが進化した場合、元々実行していた作戦を大なり小なり変化させねばならない。これでは正確な統制は取れない、軍はい

つの時代も正確でなければならぬのだ。

そして信じられないのがISを操縦するのが皆揃いも揃って人生経験の無い少女ばかり、と言うこと。果たしてこの学園にいる学生は理解しているのだろうか？ 自分達がいずれ殺し合う事になるかもしれないことを。

しかし、ISが核に代わって新たな抑止力になったのは事実だ。いや、変えさせられたと言うべきか。

子供達が兵士になる世界。しかし、世界は歪みに気付かぬまま進んで行く。俺はその流れに身を委ねるしか術を知らない。

ただ弾薬を装填し、ただ安全装置を解除し、ただ照準を敵に合わせて、ただ引鉄を絞る。それだけだ……。

最初の授業が終わり、休み時間が始まった。

教室の周りには俺のことを一目見ようと集まった奴らが大量に群がっていた。しかし、一向に誰も話しかけてこないで一定の距離を開けていた。

(ウゼエ……)

その前まで気の重くなることを考えていた為、俺の気分は最悪だった

(煙草でも吸いに行くか)

そんなことを考えていると不意に声をかけられた。

「……ちょっといいか？」

視線を上げると目の前に何処かで見たことのある顔が写っていた。

「………第？」

「………」

六年ぶりだが間違いない、こいつは篠ノ之箒だ。

(再会の挨拶ってか？煙草吸いたかったのに・・・)
俺の気持ちも露知らず篠ノ之は一言

「……………話がある。屋上でいいか？」

(まあいいか……)

「了解した」

返事をする和篠ノ之は

「ついて来い」

と言うと俺達は屋上に向かった。

屋上上がった瞬間、篠ノ之は俺に向かって怒りと悲しみが混じった目で。

「……………何があった？」

「……………」

「何があったと聞いている！！何故その様な目をしている！！」の六年の間に何があったのだ！！！！」

その言葉は俺に深く突き刺さっていく。しかし、俺はこいつと話す資格を持っていない。でも、これだけは伝えておこう。

「……すまない、箒……俺はお前と話す資格は無い……」

「一夏……?」

「だから今は近づかないでくれ。話しかけないでくれ。お前の知っている一夏はもう居ない……」
箒の顔が暗くなっていく。

俺……本当に悪い奴だな……

「でも……これだけは覚えといてくれ。俺がお前らを忘れたことは一度もない、お前は俺の大切な幼馴染だ……だから何も話さない」

「……本当に大切な人だと思っているのか?」

今まで黙っていた箒が口を開いた。

「ああ……」

「だったら……」

箒は何かを決意した様な顔でこう言った。

「だったら……今はまだ何も話さなくていい……だが……私はお前の味方だぞ!」

それだけ言うと箒は教室に戻っていった。

「お前の味方・・・か。そんなことを言われたのは久しぶりだなあ」
俺は懐から葉巻を取り出しライターで火を付けた。独特の味が口の中
に充滿した。ふと空を見上げてみた。真っ赤に見えた空は、少し
だけ蒼くなった気がした・・・。

1021 (後書き)

やっと第二話投稿できました！早く戦闘シーンに突入したいです。
あと一話の文章は見なかったことにしてください。クソすぎました。
それと読んだら是非感想を下さい！お願いします！

1031 (前書き)

注意：作者は別にセシリアが嫌いというわけではありません。

二時間目はISの基礎知識の授業だった。俺はこの程度の知識など三年前には既に暗記していたので軽い復習をする様な気持ちで聞いていた。

授業中にちよくちよく筈が俺のを見ていたが俺は振り向きもせず授業を聞いた。

(あいつとはもう関わっちゃ駄目だ・・・あいつをこれ以上悲しませたくはない・・・)

脳裏に浮かぶのは先程屋上で筈が言った言葉だった。

『私はお前の味方だぞ!』

(駄目だ、俺はあいつと話す資格は無いんだ。あいつはあんなことを言ってくれたが・・・こんなうす汚い俺が・・・あれだけ殺した俺が、今更あの頃に帰ることなど許されない・・・)

俺の気持ちは沈んで行く、それを紛らわす為に真剣に授業を聞く(多分・・・あいつはきつと放課後も俺の所に来るだろう・・・その時にハッキリ言おう)

俺が自分の考えを決めた所で授業は終わった。

二時間目が終了し二回目の休み時間が始まり俺は復習を始めていた。教室には相変わらず俺の姿を見に来た奴らが集まっていた。

(案外慣れるものだ・・・)

二時間目を終えた俺は早くもこの状況に順応し始めていた。

(長い間、戦場に居たからか・・・)

戦場では絶えず周りの環境が変化する。兵士は素早くそれに順応し

なければならぬのだ。

「ちょっと、よろしくて？」

不意に声をかけられた。振り向いて見るとそこには『いかにも』今の女子と思われる髪の長い金髪の女が立っていた。

(この類の人間は嫌いなんだが・・・)

俺はこういう世間知らずの平和ボケ野郎が大嫌いなのだ。俺たちがセンチネル？や？男達？が行ってきた努力を全否定する様な輩が。

「何の用だ？」

俺がウンザリしながら応えると平和ボケ野郎はワザトらしく声を上げた。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度があるんじゃないかしら？」

(ウゼエ・・・)

俺は内心かなりイラついていた。しかし我慢して俺は平和ボケ野郎に応えた。

「そいつはすまねえな。俺はあんたが誰か知らないからな、？それ相応の態度？ってモンがわからねえんだ」

少し侮辱を込めて言い返したら平和ボケ野郎は声を荒げて

「このわたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

(うるせえなあ！このクソ売女ビッチが！！)
だからなんだ？代表候補生ならそんなの当たり前だろ。

「そんなの知らないし知りたくもない。で、そのイギリスの？エリート？様が俺に何の用だ？」

「いえ、ただ世界で初めてISを男で動かした者がどんな人物なのか確かめに來ただけですわ。ですが、とんだ見込み外れみたいですよ」

「そりゃ残念だったな見込み外れで」

「ふん。本来ならこのわたくしのような選ばれた者とクラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。それをもう少し理解していただける？」

「それは良かったな。赤飯でも炊けっただか？」

「……馬鹿にしていますの？」

「幸運だっけ言ったのは何処の誰だよ」

「あなたって人は……ふん。まあでもわたくしはエリートなので何か教わりたかったら、まあ……泣いて頼んだら教えて差し上げて良くつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから。」

(大した自信だな……)

このクソ売女ビッチは唯一を物凄く強調して言った。でも一つ誤りが

ある。

「入試か・・・教官なら俺も倒したぞ」

「はっ？」

「確かに倒した。ノーダメージで三分くらいでな、弱ったたぜ」

俺の言った事がショックなのかクソ売女ビッチは驚いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子だけの話だろ」

「っ、つまりあなたも教官を倒したって言うの!？」

どうやらこいつは教官を倒したのは自分だけと思いついでいたらしい。何ともぶっ飛んだ野郎だ。

「そんな!!信じられせんわ!!」

「落ち着け、信じるも何もこれは史実だ。現実を受け止める」

「これが落ち着いていられるもんですか!!なんでー」

クソ売女ビッチが喋ろうとした瞬間三時間目開始のチャイムが響き渡った。
(ふう・・・やっと終わったか・・・)

「っ・・・! また後で来ますわ!!逃げないことね!よくって?!!」

俺はとりあえず首を縦に振った。

(ウゼエ奴が現れたものだ・・・)

三時間目の授業は再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めるものになった。

「再来週のクラス対抗戦に出るクラス代表者を決める！ちなみクラス対抗戦は、入学時点の各クラスの実力を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないのでそのつもりで」

その言葉にクラスがざわめく。まあ仕方ないか、クラスの中に男が一人いるんだ、持ち上げようって魂胆だろ。

「はいっ！織班くんを推薦します！」

やはりそうきたか・・・男がいるんだから持ち上げようとしているんだろ。

「私もそれが良いと思います！」

と、誰かが言う。

(まったく・・・平和だな・・・)

俺は三年振りの？日常？に苛立ちを感じていた。長い間殺し合いをしていたからだろうか？あれだけ飽きていたはずの殺し合いが愛おしくなってきた。

(こいつ等はISを文房具か何かと考えているのか？あの？代表者候補生しかり、このクラスの雰囲気しかり、どいつもこいつも頭の

中がお花畑なんじゃないのか？
そんなことを考えていると姉貴が口を開いた。

「では候補者は織班一夏……他にいないな。いないのならこれで決定だ」

(結局俺か……仕方ない……やるか)
と、俺が覚悟を決めると突然後ろからクソ売女の大声が教室に響いた。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

そう言いながらクソ売女は机を叩いて立ち上がった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、そのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

怒ったクソ売女は言葉を続けた。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

(今こいつは何て言った？実力からいけば？極東の猿？笑えねえ)

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「いい加減にしておけよ！このクソ売女ビッチ！！」

俺は少しだけ殺気を込めて言い返した。クラスの間中は皆顔に恐怖の色を浮かべていた。それもそのはず、いきなり俺の雰囲気が変わったのだから。

そして当のクソ売女少し後退りしながらも顔を真っ赤にさせていた。

「ビ、ビッチですって！！！」

「そつだ！お前の事だよこの売女ビッチ」

俺は顔に嘲笑を浮かべながら言った。ビッチは更に顔を赤くさせながら。

「け、決闘ですわ！！！」

と、俺の事を指差しながら言った。

「いいぜ！こいよ！！ぶち殺してやるぜ英国野郎ライミ」

「わ、わたくしの祖国まで侮辱するんですの！？いいですわ！！わたくしの実力を示すいい機会。わたくしが勝ったら小間使い・・・いえ、奴隷にしてさしあげますわ！！！」

とうとう本気になってしまった。まあ良い久し振りに戦えるんだ。いいことだ。とりあえず全力を出すのは大人げないからこう付け加えた。

「一つ聞きたい事がある」

「あら、なんですか？もしかして、わたくしに手加減して欲しいと」「ちぎえよ。俺のハンデはどうする？」

その瞬間クラスから爆笑が巻き起こった。

「お、織班くん、それ本気で言っているの？」

「男が女より強かったのって大昔の事だよ？」

と、皆笑い出す。しかしその笑いも俺の言葉で静まった。

「じゃあ殺してやろうか？俺が弱いつてんならかかって来いよ！なぶり殺しにしてやるぜ」

その一言で皆静まり返った。気付いたらビッチも椅子に座り込んだ。そして姉貴が場の空気を切り替える為結論をいった。

「よし、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織班とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

そして授業が始まり俺は席に着いた。先程までの好奇の視線とは打って変わり今は恐ろしい物を見る目になった。俺はあのクソ売女のプライドをどうズタズタに引き裂いてやろうかとだけ考えていた・・・。

1031 (後書き)

何故かこうなりました。セシリア好きの皆さんゴメンなさい。戦闘
シーンは次かその次だと思えます。

1041 (前書き)

かなり間が空いてしまい申し訳ありません。時間がかかった割には出来は残念ですが。

オルコットとの件が終わり、その後は比較的穏やかな時間が流れた。オルコットとの件以降、最初は皆俺のことを怖がりながら見ていたが、少しすると普通に見ていた。稀に話しかけて来る奴がいたが俺は追い払っていた。しかし、奴らは少なくなるどころがもっと増えてきた。

（一体どうなっていやる?!あの?威嚇?は意味無かったのか?)
その理由も直ぐに判った。会話を盗み聞きしたところある女子の2人組が

『織班くんって、結構怖いけど何かカッコいいよね!』

『うんうん。無口だけどそこが渋いっていうか、男前だよね』

『それとオルコットさん言い過ぎだよ。あれなら織班くんが怒るのも無理ないよ』

などと言っていたのだ。

（おいおい。何でカッコいいとか言ってるんだよ?!まったく近頃の高校生は皆こんな奴らばかりなのか?)

どうやら俺が二時間目に言った言葉はクラスメイトには逆効果だったそして案外クラスメイトは寛大な心を持っているようだ。俺は呆れてクラスメイトに対する苛立ちも何処かに吹き飛んでしまった。

（案外・・・いいのかもしれないな平和ボケでも・・・）
俺はそんなことを思った。

そんな調子で一日目の授業が終わり放課後になった。俺の周りに居るのは俺のことに来た奴らと宿舎に帰る仕度をしている奴らだけだった。俺も帰る仕度をしていると副担任が声をかけてきた。

「ああ、織班くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

ちなみにこの副担任も俺のことを怖がっていない。おそらく俺が比較的穏やかに過ごしていたからだろう。

「はい。何ですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言いながら部屋番号の書かれた紙と鍵をよこす副担任。このIS学園は全寮制なのだ。貴重なIS操縦者を保護する為だろう。その前にもっと警備を強化したほうがいいと思うが。

「ありがとうございます」

そう言うと副担任は表情を安心させながら

「どういたしまして。でも、二時間目はどうなるかと思いましたが。セシリアさんにもいけない部分もありましたが、あんな怖いことを言っちゃ駄目ですよ」

「一応、善処します」

「はい。そうしてくださいね」

本当にこの人間は平和ボケだな、まあいいか。

「それで、俺の荷物は？」

「あ、それはですねー」

「それなら三日前に国連から送られてきた。既に部屋に運んである。感謝しろ」

突然聞き覚えのある声が話を遮った。振り向くとそこには姉貴が立っていた。

「どうもありがとうございます」

「まあ、運んだと言っても部屋に置いただけだがな。しかしなんだ？あの荷物は」

「と、言いますと？」

俺が質問すると姉貴は苦笑しながら

「まあ行けば解るだろう」

と、謎だらけの回答をした。

(ん・・・？まあ行けばわかるんだからいいか)

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用の食堂で取ってください。それと各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・その今のところ織班くんは使えません」

何だそんなことか。任務でアフリカに行っていた時のほうがよっぽど辛かった一ヶ月ほど風呂にもシャワーにも入れなかったからな。

「了解しました」

「それじゃあ私達は会議があるので、これで。織班くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

そう言っつて副担任と姉貴は教室を出て行った。教室の内外では未だに騒いでいる奴らがいるが、無視して俺は寮に戻った。

「ここが俺の部屋か」

あれから少し屋上に煙草を吸いに行っつて、それから自分の部屋を見つけたのだ。

(姉貴が言っていたことが気になるが・・・開ければわかるだろ)

俺はロックを解除してドアを開けると・・・

そこは武器庫だった・・・

「は・・・?」

落ち着いて部屋を見渡すと部屋中に銃と弾薬が置いてあった。しか

も全て最新型。そこには、拳銃から分隊支援火器に至るまで様々な種類の銃火器が置いてあった。

(おいおい。戦争でも始める気かよ?)

俺はとりあえず椅子に座った。ちょうどその時俺の携帯が鳴った。俺はその電話にでた。

「なんの用ですか？大佐」

『ハツハツハ様子を聞きたかったただだよ。イチカ中尉、送った荷物は届いているか?』

今、俺と話しているのは俺の所属している対テロ機関？センチネル？局長兼作戦指揮官のフレデリック・ロックウッド大佐だ。俺の一番尊敬する人間である。会話から察するにこの武器を送ったのはこの人のようだ。ちなみに、俺の階級は中尉。まあそこそこの階級だな。

「ええ。ちゃんと届いてますよ。でも、こんなに送る必要ないでしょ!？戦争を始める訳じゃあないんですから」

『まあそんなに怒るなイチカ中尉。念のためだよ』

「限度があるでしょ!？せめて自動小銃一挺くらいにして下さいよ!」

『OK!OK!次からそうするさ。ところで話は変わるが学園の様子はどうだ?』

「ふざけてますよ!奴らISを文房具か何かと勘違いしてやがる」

『まあそれも仕方ないさ。連中、今年でやっと16になる奴らだからな。我慢しろ』

「でも、限度がってもんがありますよ。こんな奴らが次世代の国防を担うことになるって思うと、頭が痛くなります」

『慣れるまで仕方ないさ。まあ、高校生活を楽しめ。お前、確か高校行っていないだろ？』

「ええ、まあ」

『だったらいいじゃないか。若いうちに青春しておかないと後悔するぜ。それに、お前には辛い任務ばかりさせてきてしまった。だから、こちらにも少し恩返しをさせてくれ』

「は、はい……」

この人の言葉にどれも的を得ている。俺はこの人の言葉にただ、頷くしかできなかった。

『話は変わるが会ったのか？幼馴染に』

「ええ、会いましたよ。一応、六年前からちつとも変わっていないかった。でも……」

『でも……何だ？』

大佐が問いかける。

「俺なんか……アイツと話す資格なんて無いと思うんですよ。」

この血に汚れた俺が・・・」

『・・・・・・・・』

「本当にアイツ等には感謝しているんですよ。アイツ等が居たから俺は何とか死なずにここまで生きてこれた。どんなに絶望的な状況でもアイツ等を思い出したら気力が湧いてきた。だからこそ、思い出は綺麗なままにしてほしいんですよ。まあ、それも無理な望みですが」

『と、言つと？』

「いえ、一時間目に箒が話しかけてきたんですよ。俺は、できることならアイツ等に近づきたくはなかった。それを箒に伝えたんですよ。そしたら箒が？お前の味方だぞ？とか言つて去つていったんですよ」

『だったらありのままの姿を伝えればいいじゃないか？』

「だからこそキツパリと言わなきゃ駄目なんですよ。きつとアイツは昔の俺が好きだったんですよ。だから六年ぶりだつていうのに俺の事がわかつた。でも今の俺は昔の俺じゃない。今の俺は血に飢えた獣。戦いを欲し、殺し合いに快楽を感じる狂人。そんな俺を知つたらアイツは悲しむ、そんなのは嫌なんです」

『だから嫌われ者になるつてか？甘つたれるなよ！』

それまで相槌を打つただけだった大佐がいきなり怒つた。

「はい・・・？」

『確かお前の幼馴染 篠ノ之箒は、ISの開発者 篠ノ之束 の妹だろ。きつと今まで全国をたらい回しさせられてきた筈だ。多分友人なんて一人も出来なかつただろう。お前にとってそいつが大切な人間のように、そいつにとってもお前は大切な心の支えだったと思うんだ』

「はい・・・」

『だからお前にそんな事を言っただろう。お前に拒絶されたらそいつはどうなると思う？そんな奴を悲しませてみる？それこそお前、最低の奴になっちまうぞ』

「そのとうりだと思います。ですが俺は変わっちまった・・・今の俺はただの？殺し屋？そんな奴が今更・・・」

『男なら責任持つてみる！！そんな事で責任を放棄するな！お前がそうさせたんだろ？だったら最後まで責任とれ！！』

「・・・」

俺は大佐に打ち負かされた。確かに俺は責任を放棄していただけかもしれない。

「・・・わかりました。俺が間違っていました。ちゃんと責任を取ろうと思います」

『何、わかればいいんだ。それじゃあくれぐれも幼馴染を泣かすなよー！』

そう言うと大佐は電話を切った。俺は先程とは違う気持で部屋を見

渡した。

（今更俺の生き様は変えられない。俺はどんなに足掻いても？殺し屋？だけど責任はきちんと取ろう）

俺は覚悟を決めると無雑作に置かれた銃火器の整理を始めた。

1041 (後書き)

やっぱり小説を書くのは難しい。改めて他の作者様に敬意を感じました。戦闘シーンは恐らく次の話になると思います。それと読んだら是非感想を下さい。最後にお気に入り登録して下さい皆様ありがとうございました。

1051 (前書き)

やっと終わった・・・今回等の性格がおかしくなります。

あれからしばらく銃火器の整理をしているとドアがノックされた。
(来たのか?)

俺がドアを開けるとドアの前に複雑な表情の篤が立っていた。

「まあ……とりあえず部屋に入れ」

「わ、わかった」

篤が部屋に入り俺がベットに座ると篤も反対側のベットに座った。

「……………」

「……………」

互いに沈黙が続いた……先に口を開いたのは俺だった。

「あのさ……………」

「なんだ……………」

「朝はすまなかった!!」

俺は頭を下げた。いきなり俺が頭を下げたので篤は驚いている。

「い、一夏!?!」

「お前の気持ちも考えないであんな事言っただけに悪かった!俺は

最低な奴だ！お前は心配して声をかけてきたのにあのようにつっぱねてしまって、どうか許してくれ」

俺は頭を下げ続けた。しばらくして箒が話かけた。

「一夏、顔を上げてくれ・・・」

俺は顔を上げた。そこには先程とは違う穏やかな表情の箒がいた。

「もう謝らなくていい。お前の気持ちは十分に伝わった。一夏、まだ話さなくていい。話す気になったら言ってくれ。お前にどんな事が起きようとも、私はお前の味方だからな！」

「本当にいいのか？」

「ああ。そうだと」

「ありがとう・・・箒、すまなかった。だが、もう昔の俺はいないんだぞ？」

俺が問いかけた。

「そんなのは、どうでもよい。人は変わる生き物だ。それに・・・いきなり箒がモジモジしはじめた。

「それに？」

「それに・・・一夏、前よりいい人間になったしな・・・」

「そんな事は無いと思うが・・・」

「き、聞かなかった事にしてくれ！さあ和解したことだ。夕食を食べに行こう」

「それも、そうだな。じゃあ行くか」

(俺は最高の幼馴染を持ったな・・・)
そんなことを考えつつ俺たちは食堂に行った。

あれから一日がたち、俺と篤は食堂で朝食を取っていた。相変わらず周りは女子だけだが、俺は昨日までに感じていた苛立ちは感じなくなっていた。

「一夏、一つ聞いていいか？」

「何だ？」

「昨日は聞けなかったのだがお前の部屋にあった大量の武器はなんだ？」

「まあ・・・気にするな」

「気にするなと言われてもだな・・・」

「お、織班くん、隣いいかなっ？」

「ん？」

振り向くと朝食のトレーを持った女子が三名、俺の反応を待っていた。

「別に構わないが」

俺が応えると俺に声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、他の二人は小さくガッツポーズをしていた。

「ああ〜っ、私も早く声をかけておけばよかった・・・」

「まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「結構怖い雰囲気だけど以外と優しいかもよ」

そいつ等が席に座ると箸が少しむすつとした。

「織班くんって朝すっごい食べるんだー」

「お、男だねっ」

「これくらい食わないと体が持たないんだ。逆に聞きたい。お前たちはそれで足りるのか？」

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

「そ、そうか」

「一夏、私は先に行くぞ」

「ああ、またな」

箒は食事を済ませ席を立った。

「織班くんって、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「な、名前で呼び合っているし」

「まあ、幼馴染ってところさ」

誰かの『えっ!?!』と言う声が聞こえた。別に驚かなくてもいいだろ？

「え、それじゃあー」

と、谷本と言う奴が質問しかけたところで突然手を叩く音がした。音の主は俺の姉貴だった。

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したら校庭十周させるぞ！」

その途端、今までノロノロ食べていた女子達が急に急ぎはじめた。

(はぁ・・・めんどくさい学園に入学しちゃったもんだ)

その日は昨日にも増して声をかけてくる奴らで一杯だった。俺は何とか受け流しながら授業を聞いた。

二時間目の休み時間。俺が質問攻めにあっていると例の売女ビッチが声をかけてきた。

(ウゼエ・・・)

「織班先生に聞きましたわ。あなた、専用機持ちなんですってね。安心しましたわ。これで対等に勝負できますわね」

「そいつはよかったな・・・」

「まあ。何方にせよ、わたくしが勝つのは目に見えています。何せわたくし、イギリスの代表候補生ですから」

「代表候補生？その名のとうり国家代表IS操縦者の候補生。聞こえはいいが、ただの小娘の中から使える奴を抜き出したに過ぎない。替えは幾らでもいる。だが、少なくともコイツは選ばれたと勘違いしているが。」

「・・・」

「ちょっと無視しないでくださる！！あなた、専用機持ちがどれだけ名誉なことか、わかっていらっしやるの？」

(このIS至上主義者め！たかが代表候補生だろ？こんな奴戦場では使い物にならないぞ)

戦争に必要なのは、命令に忠実な兵士と確実に動作する兵器。こん

な未熟な小娘なんぞ即刻PTSDで病院送りだ。

「OK、OK、わかったからその耳障りな声を止めてくれ！」

「……つくづく馬鹿にするんですのね。まあ、その自信もわたくしが崩して差し上げますわ」

「だったら俺はお前のプライドをズタズタに引き裂いてやるよ！
箒、飯を食いに行こうぜ？」

俺がいきなり箒に振る。すると箒はビクリしながらも

「わ、わかった。行こうか、一夏」

「じゃあな。？代表候補生？さんよ」

後ろで奴が何やら言っていたが俺は無視して食堂に行った。

「一夏」

食堂に着き何とか席を見つけ昼食を取っていると心配そうに箒が話かけてきた。

「何だ？箒」

「本当に大丈夫なのか？オルコットとの対決は」

「ああ、そのことか。なあに心配しなさんな、篤さんよ。これでも長いことISに乗っているしな」

「どっぴいっぴー」

「ねえ。君って噂のコでしょ?」

いきなり、隣から女子に話しかけられた。見ると三年生、俺と同じ18歳くらいの奴が立っていた。

「まあ、因果なことに」

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと?」

「まあ、成り行きで」

(まったく、女子の情報伝達力は凄いな。もう広まっている)

「でも君、素人だよね? ISの稼働時間いくつくらい?」

(俺が素人か・・・面白くない冗談だな。こいつ、人を見る目あるのか?)

俺はこいつに呆れると同時にからかってやるうと思った。

「まあ・・・どっぴいっぴーと1000時間くらいですかね」

「えっ!?!」

こいつが驚くのも無理は無い。1000時間と言えば国家IS代表

にも至適する時間なのだ。

「なので・・・貴方に素人呼ばわりされる筋合いはありません。だからどうか行って下さい」

「そ、そうね・・・それなら仕方ないわね・・・」

あまりに唐突なことに面喰らった三年生はそのままどこかに消えた。

「本当なのか？」

篤が驚きながら尋ねてきた。

「何が？」

「だから、本当にISの稼働時間が1000時間くらいなのかと聞いている」

「ああ、本当ぞ」

「お前にも色々あったのだな・・・」

「そう言うことだ。話は変わるが篤？」

「何だ？一夏」

「六年ぶりに剣道の手合わせしないか？」

「ん？・・・そうだな、そうしよう。では放課後、剣道場でやろう」

「了解」

そして放課後。俺は今、学園内の剣道場にて箒と剣道の手合わせをしていた。ちなみ俺の勝ちだった。

「ふう・・・六年前よりも更に強くなったな。一夏」

「まあ、練習は続けていたからな。しかし箒も強くなったな」

「そうか？しかしお前には程遠いがな」

「そんな事いうな。話変わるけど確か箒、剣道の全国大会で優勝したんだってな、おめでとう」

「な、なんで知っているのだ!？」

「何でって、だって幼馴染が新聞に載っていたらわかるだろ？」

「そ、そうだな。しかしこれ程強いとは、これならあのオルコットにも勝てるだろう」

「何、元から負ける気なんてねえよ」

「それもそうだな。よし稽古を続けよう!」

「おう！」

そして六日が経ち決闘当日。第三アリーナには早くも見物に来た学生で一杯だった。そしてここはピット、周りには姉貴、副担任、箒がいた。

「では織班、ISを展開しろ！」

姉貴の声と共に俺の身体が光に包まれる。光が収まると中から異様な姿をしたISが現れた。

全身の装甲をガンメタルに輝かせ、おおよそ造形美というものを一切考えないで作られたと思われるデザイン。そして全ての武装を装着させ、モノアイのみが赤く光っている。それはISと言うより？兵器？であった。

「す、すごいですね・・・」

「じ、これは・・・」

「・・・！！！」

全員がそれぞれ驚いている。

「こいつの名前は？ウォードッグ？戦争の犬だ。すごいだろ？」

そして俺はシステムチェックを開始させる。
コンピュータの無機質な音声が状況を知らせた。

「全システム、問題ありません。システム戦闘モード起動します」

「織班、以上はないか？」

「ああ、問題無しだ！」

「よし！では行ってこい」

そして俺はピットゲートまでESを動かしかタパルトの上に足を置いた。

「一夏」

篤が声をかけてくる。

「何だ？」

「勝ってこい！」

「了解！」

俺はその言葉に頷くと機体を発信させた。

「さあ、久し振りの戦闘だ。楽しませて貰うぜー！」

1051 (後書き)

次こそ戦闘シーンです。あと読んだら感想を下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1266z/>

インフィニット・ストラトス～蒼き空を血に染めて～

2011年12月15日00時48分発行